

手話通訳に思いをはせて

手話通訳士
関尚子さん

「生きがい」や「働きたい」。
そんな言葉がふさわしい人に出会うと、
なぜか小さな勇気を
もらったような気持ちになれます。
このコーナーでは、私たちの身近なところで、
そうした思いで働いている方々を
紹介していきます。

第5回
将来へのまなざし

全国に約36万人いる聴覚障害者。その代表的なコミュニケーション手段といえば手話。今回は、手話通訳士として活動する関尚子さんにお話を伺いました。

●きつかけは 職場で目にした手話通訳

「手話にもスラングがあるんですよ。公的な場では使いませんが、親しい者同士の集まりではよく使われます。単語の質にもよりますが、だいたい若い人たちが作つて、そこから広まるようです。もちろん、方言もありませんし、覚えていくととても奥の深い世界です」
こう語るのは、薬剤師として働くかたわら手話通訳士として活動している関尚子さん。

その関さんが手話を始めたきつかけは、以前働いていた病院で、手話で案内される聴覚障害者を偶然見かけたこと。

「案内していたのは病院の職員でしたが、薬局の窓口で何度か目にするうちに、私もやってみようかなと、ごく自然に興味を持ちました。聴覚障害者が主人公のテレビドラマで感動したり、友人に耳の聞こえない人がいるなど、手話を始めるきつかけはいろいろです。でも、私の場合は職場がきっかけですから、もし薬剤師になつていなければ、手話はやつていなかったかもしれません。覚えるのには、週1回2時間の講習会に通い3年掛かりましたが、そんなに大変じゃなかったです。少しずつ覚えて実際に使ってみると、通じるんです。それがうれしくて……」

活動で不便を感じないように、全国の各自治体はそれぞれ手話通訳者派遣センターを運営したり、地域の社会福祉協議会を通じて、要望に応じ手話通訳者を派遣しています。派遣される手話通訳者はそれぞれのエリアで登録した人で、関さんの場合は東京の豊島区に登録。派遣される手話通訳者には自治体から報酬が支払われますが、豊島区の場合は2時間で3000円、1回の派遣での上限は6000円と決まっています。

3年間講習会で勉強した後、さまざまな現場で手話通訳を9年、手話通訳士の資格を取つて今年で3年目となりました。

「そうですね。お金を目的とする仕事ではないですね。やはり、誰かの役に立ちたいという気持ちでしょう。でも、社会のためとか、そんな大げさなことでもないです」

とはいえ、手話通訳を続けるには、日ごろの努力も必要だと言います。

●必要な日ごろの努力

聴覚や音声言語機能障害者が、日常生活や社会

「手話は言葉と一緒にですから、使わないとうまくならないし、忘れてしまうこともあります。ですから、

通訳の現場に行くのとは別に、週に1回、地域の手話サークルに参加しています。そこで地域に住んでいる耳の聞こえない仲間や、手話を学習する仲間と手話単語を学習したり、ゲームで手話を学んだりしています。終わった後は、みんなで飲みに行つて楽しんでます」

また、ときには、先輩手話通訳士の仕事に接することも大切とか。

「ええ。上手な先輩方が多くいらつしゃつて、いつも感心しています。刺激を受けるといふか、お仕事をしていると、私なんかまだまだだと思えます。早く先輩方のようになりたいです」

●手話通訳士という活動を始めて

平日は仕事があるため、手話通訳士としての活動は月に1〜2回。ときには病院に同行することもありますが、薬剤師としてのキャリアは生かせるのでしょうか。

「薬剤師のキャリアですか？ 知識が役立つことはもちろんあります。でも、あくまでも通訳することが目的ですから、キャリアは関係ありませんね。通訳者は、大人同士のコミュニケー

ションを手助けするのが仕事。例えば知識があつても、前面に出ることはありません。それが通訳です」

また、通訳は会話の手助けだけではありません。書類の内容を確認するために、通訳をすることもあります。

「聴覚障害者の中には、文字を読むことが苦手な高齢者の方もいらして、役所などから送られて来る書類の説明をしてほしいという要望です。場合によっては、一緒に役所に行くこともあります」

このように若いながらも、さまざまな経験をしてきた関さんですが、ときには戸惑うこともあるそうです。例えば、手話通訳によるコミュニケーション経験の少ない健聴者が、「ここは通訳しなくて結構です」と、

つい口にしてしまう場合です。

「コミュニケーションの手助けをしようと思つて、行くわけですから。そんなときはちょっと…」

●「うまくなったね」と手話でほめられて

聴覚障害者の人たちと付き合うことで、音のない未知の世界を想像したり、相手に対する思いやりの必要性を痛感し、自分自身も成長したと言ふ関さん。

そして、別れ際に、こんな一言。「いつも考えています。耳の聞こえない人たちのことを…」。この言葉の裏には、関さんのこうした手話通訳に対する思いが込められているのでしょうか。そんな関さんの、最も記憶に残るエピソードを最後に紹介します。

「以前、通訳をさせていただいた聴覚障害者の方ですが、偶然数年ぶりに再会。そのときのことですが、『すごいぶんうまくなったね』と手話で言つてくれて…。本当にうれしかったです」

*手話通訳士 ◆厚生労働省が制度化し、社会福祉法人聴力障害者情報文化センターが認定している資格。手話通訳士として登録されているのは、現在のところ全国で約20000名。

